

# 性全説

GUNUNU

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはきっと、ありふれたボーイミーツガール

性全說

目

次

1

## 性全説

4月1日、人類は滅びた。

理由はなんであつただろうか。空がまぶしく輝いたことだけは忘れられない。

4月2日、人類は再編された。

何が起こったのかはわからない。考えてしまつたら死んでしまうかもしない。それほど混乱している。

景色は普段と何一つ変わらない。地上には駅があり、線路がひかれている。当然周辺には家が建ち並び人の存在感をひしひしと感じさせてくれる。

世界が滅びたことをなぜ私が認識しているかには心当たりがある。

3月中旬、大学の春休みを利用し、前々から疑問に思っていた計画を実行した。

海中を潜り景色を楽しむスキューバダイビング。人間が潜るという行為が水中でのみされていることに私は前々から身を切るほどの耐えがたさを持っていた。

普段歩いているこの大地でマリンスポーツのように気軽に楽しめたらと思うことは当然のことだろう。

そう思い自宅の庭にスコップを担ぎ鼻歌を歌いながら白チョークも持ち、地面上にチョークで丸い目印を付けた。そうしてただひたすら無心で穴を掘り続け、人ひとりは入れる巨大な穴を作ることができた。これが3月31日の話である。

その後穴の中、呼吸孔のための握りこぶしほどの空氣穴で息をつなぎ一日を穴内で過ごした。

世界を破壊した存在といえども自邸の穴の中に人がいるとは考えられなかつたのだろう：

世界が再編されたことをなぜ私が認識しているかには心当たりがある。

早朝とともに穴から這い出た後にリビングに戻った私は朝食を食べつつテレビをつけた。

笑顔を浮かべた美人なアナウンサーが画面に映っていた。

テレビ内では日本のある島についての報道であった。

「（）が最近話題のおまんこちゃんランドです。」

思わず牛乳を吹いた。

……こいつは何を言っているのだろうか。

アダルトビデオでも入れてしまつたのかと転びそうになりながらもテレビを確認した。

ディスクは無く、これが公共の放送であることが分かつてしまつた。

頭がおかしくなりそうになりつつも事実は事実として受け止めていた。

人間は極限までパニックになると逆に冷静になるらしい。

スマホで「おまんこちゃんランド」と検索をかけると江戸時代からある日本の島であることが分かった。

第二次世界大戦中、アメリカ軍に上陸された時でさえもSEXを行い、性を体現したその姿は周囲の兵士達すらも巻き込み前人未到の5000Pを成し遂げたことがあるとか、

おまんこちゃんランドから帰ってきた5代目将軍、徳川綱吉があまりにも感動し首都である江戸をおまんこまんこと改名し、江戸城をおまんこまんこキヤツスルと称した事件まで出てきた。前者は日本で唯一血が流れなかつた事例として日本の教科書で紹介されており、後者は第六代目将軍家宣に

これはちょっとまずくね？先代はつちやけすぎじゃね？と思われ江戸に名称を戻された逸話が残されていた。

調べ終わつた俺は膝をつき嘆いた。

そして生まれて初めて神に助けを求めていた。

しかし懇願しながらも股間はそそり立つていた。

おまんこちゃんランド検索の際、その名に恥じないほどのエロ画

像の嵐に晒されたのだ。

そう、俺は何も知らない状態でありながらも興奮していたのだ。

こうして俺のおまんこちんちゃんランドは開園したのだ。

新学期が始まり授業に出て帰る日常が始まった。

人生一番の衝撃にあつたとは思えない拍子抜けした毎日にどこか肩透かしを食らっていた。

恐ろしいのはご飯を食べても、寝てもおまんこちんちゃんランドのことしか考えられない自分であつた。

そこで授業期間にも関わらずおまんこちんちゃんランドに行く決意を固めた。

おまんこちんちゃんランドに行かなれば何も手につかないと、一度おまんこちんちゃんランドに行きすつきりしなければいけないと自分を納得させた。

おまんこちんちゃんランドは東京から飛行機で約30分ほどの距離でアクセス面で非常に優秀であった。おまんこちんちゃんランドではその近さゆえに島から本土まで自らの喘ぎ声がどこまでどどくかというおまんこちんちゃん喘ぎチャレンジが行われているらしい。

飛行機が近づくにつれて飛行機内が男女問わずにうずうずしだした。

飛行機内は若い男女で溢れており日本はどうすべきだなどつぶやいた。

隣に座っている女性になぜうずうずしているのか聞いてみた。女性は不思議な顔を浮かべながらも話してくれた。

「教科書にものつていることだけど人間は世界から性的な力を生まれた時に譲り受けているの。その力が性欲となつて三大欲求にも数えられているのよ。今から向かっているおまんこちんちゃんランドはね、

島自体が性欲を発していて、みんなそこに来るとエロ不可避になつてしまふの。だからおまんこちんちゃんランドでは犯罪率はゼロだし、真の平和そのものなのよ。エロは世界を救うの。」

：理解不能だつた。

女性の生のおまんこちんちゃんランド発言は妙に生々しさがあり、そのことに関してはすばらしいものがあつた。

「お客様、そろそろ我がおまんこちんちゃんランド行の飛行機はおまんこちんちゃんランドに着床致します。

揺れに備えてください。そう、出したての精子のようになつ!!」

着陸のアナウンスがとことん氣狂いしている。

この飛行機もう嫌だ：

私はこの旅をただただ恐怖を感じながらも事実、わくわくしてい

た。

空港内は思つてたよりかは普通であつた。ただ手すりはぬめぬめしており、床は妙にてかてかしていた。

島の全貌をつかむため無料のパンフレットを受け取り中身を見てみた。

どうやらこの島は三つのエリアに分けられているらしい。

第一の場、おまんこちんぱんぱんビーチ。

親しみをこめられおっぱんビーチと略されて言われているらしい。

ビーチ内には衣服全面禁止のヌーディストビーチと水着着用を推奨する普通のビーチに分けられていた。

昔はすべてがヌーディストビーチであつたが水着からポロリする瞬間を目撃したいというポロリズムをかかげる着水隊が発足し全裸の女性に水着を着てからある程度時間をおいてからポロリしてくれないかと迫ることが多発したのでなら二つに分けようということになつたらしい。

きやいきやい笑いあつてゐる全裸の男女のイラストがページ内に

散在していた。

分かりやすくもエロいけしからんパンフレットである。

第二の場、おまんこちんちんわくわくパーク

先の場を海の楽園とするならば、ここは地上の楽園に位置付けられているらしい。

キャンプ場や休憩所、アスレチックもあり、道具をつかつた味わえないような多種多様なSEXができると評判らしい。

まれに出る生死をさまようような危険なプレイを行う輩を取り締まるべく警官が無数配置されているが警官もそのプレイに加わってしまう、警官がそもそもプレイ中、SEX後は動きたくないなど様々な問題があるらしいが、まあいいかと認識されている。

第三の場、おまんこちんちんずぼずぼストリート

おまんこちんちんランドの中心部であり、中央部のメインストリートは幅6メートル、全長100メートルにも及ぶ。あらゆる場所で性行為が行われているのでそのスケール感もあってみたことのない光景が見れることだろう。

右も左もSEX。聞こえる音は喘ぎ声。

雨の日、冬でさえ絶えずSEXが行われていることからおまんこちんちんランドを象徴する場とされている。

正直な話、感想パンフレットだけでおなかいっぱいである。これ以上的情報は勘弁してほしい。

一通り読み終え後、空港からメインストリートへと向かつた。

理由はおすすめと妙にリアルな男性器のキャラクターが言つていたからだ。

この島を知るにはちょうどいいだろう。

実際に見た景色は壮観の一言であった。

物心がついて生まれて初めて見た女性の裸は目算100以上であつた。

今は歩行者天国の時間であり、自動車がないことも相まっておもいおもいのSEXをみんな楽しんでいた。

しかも若い男女しかいなく非常に目の保養になつた。

童貞の身にこの光景は劇物である。下半身に目をやると普段の2割増しに勃起しているおちんぽを感じた。

最も近くで行為中の男女達の会話に耳を傾けた。

「ああつ、もつと、もつと、私のおまんまんにあなたのN700系が車庫を求めて右往左往してりゅううう」

「もう無理だ！ ちゃんと列車発射、発射するう！ 子宮内ステーション貫通いつくぞおおお！」

「わたしのおまんこ総辞職しちゃううう！ 子宮が辞表で溢れて乱反射してるうう」

「農林水産省つ！ 財務省つ！ 文部科学省つ！ お前は日本を孕めつ！」

すさまじい性の応酬が繰り広げられていた。見たことのないような技、レスリングのように秒で入れ替わる攻守、そこでは格闘技が行われていた。

ふと右手に重みを感じた誰かに引っ張られているようだ。  
眼を見やると金髪のかわいい少女がこちらを見ながら腕を引っ張っていた。

かわいらしい顔立ちではあるが服は下着しか着ていなくとても煽情的な恰好をしていた。

「ねえ。あなた童貞？」

：20年間隠し続けていた己の秘密を一瞬にして暴かれてしまつた。

そういうえばパンフレットの注意事項に書いてあつたことを思い出した。

これはそう、童貞狩りである。

島内の女性は肉食系を超えたバーサーカーなので童貞は一瞬のうちに襲われると。

正直めちゃくちゃ、とてもSEXしたい。どれほど自分を説得しよう

うとも自分はこの島にSEXしたくて来たのだ。

しかし素直な下半身とは逆にこの場で、性のコロシアムというべき場で性行為を行うのがとてもなく恥ずかしかつた。ホテルに行きませんかと言いたい。言いたいが女性とほとんど話したことなくまだここに慣れていないく、口からは呼吸音しか出なかつた。

沈黙を了承と受け取つたのだろうか彼女は私の股間をやさしくなで始めた。

どうしようもなくなつた俺は、泣きながらその場から逃げ出してしまつた。

自分はなんて情けないんだと自己嫌悪に陥りながら走りに走つた。後ろから絡みつくような視線を感じながら。

気づいたらビーチについていた。

そこでも至る所でSEXが行われていた。

そんな男にとつてご褒美である光景を前に岩陰で泣きながら一人しごく事しかできなかつた。

5分ほど経ち、賢者となり落ち着きを取り戻した。

この島のSEXは自分にはレベルが高かつた。それは認めなければいけない事実である。

SEXは次回の挑戦にしようと決意をした。

しかしそれでは何をしにこの島に来たのだろうか。まだ自分は何もしていない。

この島には様々なイベントが行われている。季節をテーマにした秋に似合う紅葉を表現した体位を競うコンテストや愛液伸ばしナンバー1グラップリといった記録系まである。

今回は射精飛ばし大会に参加しようと思う。

この島の射精自慢が島内一位を決める大会である。

エントリーを済ませ大会の控室に着くと屈強な男どもの姿が見え

た。

どれも屈強な体をしており相当な肉体自慢であることが分かつた。

岩場で射精してしまつたとはいえ全景がおかずになるこの島、童貞の性への渴望を甘く見てもらつては困る。

肉体ではなくあくまで射精であるということを知らしめたいと思う。

会場は予選会といえど多数の男女が入り乱れて観戦していた。

指をくわえてこちらを見守る女からすでに乱交している者まで様々だ。

コスチュームは事前に配布された無地のパンツである。主催者の趣味かはわからないがこの年で白パンツというのはなかなかこたえるものがある。

男達は会場に着くや否やパンツを一斉に脱ぎ自らのちんこを誇示するがのごとく仁王立ちをしていた。

恥ずかしがついたら変に注目を浴びてしまふだけだと様々な葛藤を心のうちに無理やり抑え、震える手を目線から外しパンツを脱いだ。

脱ぐ瞬間につつかえたような反発を感じたので勃起していることは分かつてはいたが、脱ぎ終わつたそそり立つた自分を見た時言いうもない歓喜を覚えた。

まさか自分がこんな衆人環視下で起つかと自分の意外な性癖に驚いた。

現に右隣の男性は起たずに一生懸命しごいて奮闘している。

周囲からはその男性にNO PENIS! NO PENIS! なるブーリングが浴びせられていた。

その男性は気圧されたのかちんこが徐々に萎えていき、思わず絶えられないといったように泣きながら逃げてしまつた。

：いや、他人を気にかけている暇はない。

これから射精を行わなければいけないだ。

今日あつた様々な思い出を思い返した。

どすけべ淫乱痴女、新幹線、内閣総辞職、金髪美少女。

頭にイメージが駆け巡る度、比例して興奮してきた。

しごいた手が徐々にねばついてきた。我慢汁だ。

しかしこれでは勝てない。最大限までため、射出しなければとてもじやないがこの大会は生き残れないだろう。

思い出を回し、限界と我慢の境界を反復した。

更に手がねばついてきた。

もう、我慢できない。

逝くしかない。

変わつてしまつたこの世界。

混乱のなか悔しい思いもした。

でも何かを成し遂げたかつた。

世界の変化に負けたくなかつた。

これが：俺の答えなんだ。

飛べつ、俺の精子。

今まで味わつたことのない快感が全身を駆け巡つた。

みんなの前で射精するつてこんなに気持ちいいことなんだ。

これが味わえるならもう、死んだつていいかも知れない。

快感が冷めやらないまま記録を確認しようと自分のできたてほやほや精子の行き先を見た。

…？ 前に精子が飛んでいない。

他の参加者の精子は無事飛んでいる。

血の気が引き、まさかと思い自分のチンコを見た。

一仕事やり終えた戦士の顔をしていたがその先には溜まつた濃い精子がべつたりとついていた。

その下、地面をみるとたつた今、だしたすべての精子が落ちていた。

…どうやら誤射してしまつたようだ。

そのことを理解したと同時に顔には涙が伝い、気づいたら走り出し

ていた。

太ももにびたんつびたんつと当たり、暴れる自分のちんこを感じながらこれが戒めだと自戒しながらも足を止めなかつた。

最速で空港に入り、即飛行機便を探し気づいたら俺は東京の実家にいた。

それからは食料を買いため自分で掘った穴にこもるようになつた。穴にこもつてゐる間、昼夜問わず幾百もの光が流れた。

どうやら世界は破壊と創造を繰り返させられているらしい。

リビングでニュースを見てみると毎回世界には様々な「島」が現れた。

ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、アジア。例外はなかつた。

しかし最近のニュースは毛色が変わってきた。

昨日、山梨県が消えた。

氣づいたのは天気予報を見ようとテレビをつけた時だ。

日本地図に空洞が開いていた。

明らかに今まであつた山梨が消え、海になつてゐるのだ。

これに怖くなつた俺は穴の中で光が見えるたびにスマホで世界地図を検索した。

世界最大の都市、ニューヨークといえども消失にあらがえず消えてしまつた。

周囲の人間に聞いてみてもこれが普通と語り、常識となつてゐた。恐怖を感じつつも光の間隔は速まり、今では3時間に一回のペースで世界が改変されていった。

一人孤独に約2週間も絶えれたのは一重に恐怖であると思う。

自分が正しいのかは分からなくなつていつた。もしかしたらこれが世界の常識であり、自分一人だけおかしくなつてしまつたのかと。しかし自分を信じくなつた。

何者かに今の気持ちを塗りつぶされるのが怖かつたのだ。

しかし昨日は一度も光を感じなかつた。

スマホで調べると自分が住んでいる東京以外土地は島となつて消え去つていた。

疑問に思い服を着替え、外に出てみた。

周りの人はみんな服を着ており、そのことになぜか言いようもない安心感を感じた。

この地はまだ壊されていないと。

それからは懐かしく、うれしくなつてしまつたのだろうか、東京の様々な場所をさまよい巡つた。

渋谷ではスクランブル交差点を上から見て、多くの若者を感じ、池袋では店の賑わいを味わい

上野では動物に癒された。

全てが楽しく、時間を忘れ帰るころには夕暮れであつた。  
夕暮れの景色を感じ、物思いにふけつていると目の前5メートルほど先に少女がいた。

何をしているわけでもなく道の真ん中にたたずみ、こちらをみている様子をみると多少不気味に思いつつも女性ということもあり気にせず歩みを進めた。

近づくにつれてしまいにその少女の姿を詳細に感じることができた。

長い金髪のかわいらしい少女であつた。

背景の夕焼けも相まって神秘的な絵画のような雰囲気を感じる。  
なんにせよ美しい少女だ。

でもどこかであつたような気もある……

「ねえ、私のこと知つてる?」

横を通り過ぎようとしたら唐突に声をかけられた。

驚きながらも必死に記憶をたどつたが確信には至れなく。素直に知らないと申しわけなさそうに答えた。

「私の誘いを拒否するばかりか忘れる男がいるなんて、ほんとあなたつてすごい男。」

…私の誘い?こいつは何を言つてゐるんだ?  
いや…待てよ。

誘い、金髪、美少女…まさか…

今までの一生で最も記憶に刻まれた記憶。悔しくてあまり思い出さないようにしていた記憶に確かにこの少女はいた。  
なんで忘れていたのだろう。

こうして思考を巡らせてゐる中、彼女は腕を組み何も口を発さず待つていた。  
「その顔なら思い出したよね。結構屈辱だったのよ、あの日のことは。

私の目の前で逃げるなんて初めてのことだつたのよ。それこそ今まで生きてきてね。

ほんとは殺しちゃおうか考えてたんだけどそれこそなんか負けた気するじゃない。

だからわざわざ東京だけ残してあげて話しに来てあげたのよ。」

見かけは同年代か少し下ほどなのにかなり尊大な態度をとつてい  
る。なんて偉そななんだとも思つた。

しかし彼女の発言はよく分からぬことも多かつた。  
殺しちゃおうと…

東京だけ残した…

中二病にしては「今」をとらえすぎている。

…こいつまさか、何かを知つてゐる、のか。

もしかしてとんでもないやつを自分は相手にしてゐるのではない  
のだろうか。

「察しがわるいわね。あなたたちの言うところの神よ、あたしは。」

こんなあり得ない状況にあつてもなぜか信じてしまつてゐるのは  
決してありがたくはないがこの2週間あり得ないことに耐性をつけ  
られてしまつたからだろう。

なんだこの女大丈夫かと疑う場面なのにつつと言葉が胸に溶け込  
んできた。

「意外ね。人間つてもつと疑り深い存在だと思つてた。」

やはり神なのだろうか。神がこれほどかわいいと知つたらみんな驚くだらうなと場違いなことを考えつつも様々な疑問が頭を覆つた。なぜ世界は再構築されているのか、消えなければならぬのか。

このことを聞いてみた。

「ほかの神、木星のやつね。そいつと賭けゲームして遊んだんだけど見事に負けちゃつてね。なんかほしいのあげるわよつて言つたら地球の大地と人間が欲しいとかいうからしようがなくね。なんか儂も遊びたいだのなんだの言つてたような…」

言葉がでなかつた。

重要なことを全く悪びれず、気楽に語る彼女はまさしく人間ではないのだろう。

彼女は続けてしやべつた。

「でもなんかかわいそまだから人間を選別して島作つてあげたの。私もいい神よねえ。」

一人で勝手にしやべり、納得している彼女はかわいいがまたしても言葉が引っ掛けつた。

選別してである。

勝手に言いようもない恐怖を感じながらおそるおそる尋ねてみた。  
「ん？島みて気づかなかつたの？明らかに小さいじやない。あんなどころに全員入るわけないじやない。

つていうかあの島見たでしょ全部あんな感じよ。

あの島には若い人しかいないでしょ？15歳以下と30以上の男女は消えてもらうわ。ついでに童貞と処女も生産的じやないから省いたの。

生産性を高めるためにもあの島の住人には性欲しか考えられないよう設定しておいたの。いいシステムでしょ。」

彼女は誇らしげに自分が考えたシステムを自慢げに話した。

人間にこの思考はできない。笑いながら人を選別するだの、あまりにも心がない。

確かにあの島は若い男女しかいなかつた。その事実がこのことが

真実だと訴えてくる。

人間を昆虫や犬と同格に扱っているが彼女にとつてはなんら変わりなく見えるのだろう。

「最初に人間の常識を変革させたのに効かない人がいるなんて私も驚いたのよ。世界で一人よ、一人。それで調べてみたら自宅の庭で穴掘つて偶然逃れたなんて初めておなかを抱えて笑っちゃつたわ。

だから島に近づいてご褒美にSEXでもしてあげようかと思つたら断られたのよ、どこまで私を驚かせるつもりなのかしら。

その後の変革ももれなく穴の中で回避するし本当に興味深いわね、あなたは。」

褒められているのかよくわからない言葉でまくしたてられた。よほど言葉に熱が入ったのかしやべり終わつた彼女との距離は目と鼻の先であつた。

理解できない神という存在でも美少女は美少女。興奮しないわけがない。彼女の碧い目から離せなくなつていて自分を自覚した。

「私はあなたを気にいつてるの。ねえ、SEXしましょSEX。」

彼女は私の両肩を強くつかみ息を荒げてこんな言葉を言つた。

急な誘い文句に口をあけ啞然となるしかなかつた。

でもその姿はまさしく最初に出会つた時の焼き直しのようでもあつた。

「だから童貞だとこのままじゃ死んじゃうでしょ。こんなに私を楽しませたのよ。あっぱれって感じ。あんたどうせ明日も童貞でしょ。明日には滅ぼしちゃうのよ。感謝しなさい私で脱童貞することを。」

正直本当にありがたい話だつた。これほどの美少女、しかも神が脱童貞相手なんて今までの人類史の英雄ですら成し遂げられなかつた偉業であろう。正直さつきから勃起もしているし興奮しつぱなしだ。いますぐでも押し倒したい。

しかし押し倒してしまることはイコールおまんこちんちんランドの住人のようになつてしまつということだ。知らない状態で変わつてしまふのはいい。でも自分を知つている状態で快樂に負け自分を失うのは何よりも怖いし、自分が許せなくなる。それこそ、死にたく

なる。

こんな状況で断る男なんて過去遡つても俺一人なんだろうなと思いつつも、ちっぽけなプライドのために命すら捨てようとする自分に笑いが止まらなかつた。

ほんと馬鹿だけど、ほんと悪くない。

神の申し出を二回も断るのだ。おそらく命はないだろう。俺は彼女の眼を放さず、今までしたことないほど懇切丁寧に土下座をして謝つた。

「本当に申し訳ないですが私を思つてのありがたい申し出ですが断らせてもらいます。私はまだ、私でありたいです。死ぬときは私のまま死にたいんです。」

何分、何時間たつただろうか。いや、実際は10秒経つていないのでかもしれない。体内時計がぐちやぐちやに狂いそうになりながらもへたくそな敬語で相手に伝わつているか確認するため顔を少し上げ相手の様子を伺つた。

そこには笑みを堪え切れない様子の神様が見えた。

「うん。うんうん、そうだよね。君はほんとに愚かな人間だつたよね。同じ男から2回もふられるとか本当に本当に面白すぎでしょ、私もこいつも。」

その後数分笑い、収まつた頃に涙をぬぐいながら話しかけてきた。「君がそう言うやつだつてやつとわかつたわ。馬鹿は神より強いね。」浮かべている表情は初めてみたような笑顔だつた。その美しい笑顔に股間は正直なものでビンビンに反応していた。

こんな美しい女性を断るとか何様だとおもいつつどうやつて殺されるのか、想像していた。

「こんな面白そうなおもちゃ壊すわけないでしょ。今からあなたをずっと見てるわ。神に切つたその啖呵どれほどものか見せてよ。ねえ、これから私をその馬鹿さで楽しませてよ。」

：殺されなかつた？ 楽しませてみろ？

神にここまで言われて逃げれるわけがないだろう。

見ていてほしい。変わつてしまつたこの世界、性に支配されたこの

世界。

意地とちつぽけなプライドで己の童貞を守るところを。  
神様を死ぬまで楽しめよう。

誓おう。

「それで、この馬鹿ね。

期待してるわ。」

そう言つて彼女は翼を出し、天へと帰つた。  
その美しい笑顔を俺の頭に残して。

あれから幾ばくの時がたつただろう。いろんなことがあつた。本当にいろんなことがあつた。

あれからすぐ光に包まれた俺はあのおまんこちんちゃんランドに移動させていた。

その後スマホで東京と検索しても何もなかつた。消えたのだろう。幼いころから育つた土地だ寂しさは感じた。でも未来には希望しかなかつた。

おまんこちんちゃんランドはそれこそ刺激が強かつた。

童貞の身ではやはりなおさらだ。これほどとは思わなかつた。童貞というだけで何十人の女に襲われる毎日。

家で寝ていてもいつの間にか隣に知らない女性がいた日もあつた。さすがに一人で寂しく、拾つた子供が自分のことを襲つてきた日だつてあつた。

…本当に濃い人生だつた。

3大欲求の1つをおさえることがこんなに大変でつらい地獄のようないものとは思いもしなかつた。

こんな状況でも耐えられたのは神様のおかげだ。それだけは言える。

神を振つておいて凡百な女性どもとやるなんて考えられもしなかつた。

もう80か：

もう自分が長くないことを知っている。体が全く動かないからだ。昔を思い出すぐらいに弱つているのか、それしかできないのか。

周りにはあれから拾つた子供たちが成長した姿を見せ涙を流している。

たまに死にそうな自分の姿を見て泣きながら興奮しているようなやつもいるけど…やつぱりぶれないなこの島はと変な安心感を感じていた。

本当に大変だつた。…でもその倍以上楽しかつた。  
最高の…人生だつた。

ああ、何も聞こえない。  
目の前が暗く…

「ほんとに君はバカだつたね。」

この美しい声は聞き間違えようがない、神様だ。

その姿は初めて会つた時の60年前といつさい変わらなかつた。相も変わらず美しい。本当に、きれいだ。

「死ぬまでずっと見てたよ。女から必死に逃げ回つたり、子供に逆レ

イプされそうになつたり、ほんとに面白いやつだよ。落ち込むと毎回穴を掘つて一日を過ごすから晩年なんか100個ぐらい家の周りに穴掘つてたでしょ、遺体運ぶ時運ぶ人がつまずいて君は穴に入っちゃつたんだよ。それで穴好きの意思を継いで君だけ土葬になるなんて死んでも面白いやつだよ。」

そういういつつ彼女は笑みを絶やさなかつた。心からこの会話を楽しんでくれている。うぬぼれだつたら恥ずかしいがそう思つてしまつた。そう思いつつ自分の口元を触れてみると弧を描いていた。俺も同じじやないか。本当に笑える。

彼女との会話は尽きることが無かつた。つらかつたことや、面白かつたこと。感動したこと、興奮したこと。彼女は自分のことを見ていたのだ自分の話をすればそれが相手に伝わる。

そうして彼女と俺の2人で思いでを補完していくた。

それは今まで会えなかつた空白の時間を一人で埋めるかのように。ふと疑問に思つた。どうして自分はここに若い姿のままいるのだろうか、と。

話せるのならばどうでもいいがここは天国であるのか、はたまた地獄であるのか。

自分はどうなつてしまつたのか疑問に思い、尋ねた。

「ここは天国だよ。その最上部、天の間だよ。こんなところ神ぐらいしか入れないんだよ、すごいところなんだからね。」

それは光栄なことだ。

また一つ彼女のことを知れたようどうしようもなくうれしい気持ちになつた。

そうしたら彼女は息を整え見たことない真剣なまなざしを向けて、意を決したように話をしてきた。

「今までずっと君を見てきた。私が一人の人間をこんなに見たことなんてなかつた。最初は興味本位だつた。でも、次第に目が離せなかつた。あなたが悲しんだら、私の心も痛くなつた。あなたがうれしいときは私もうれしかつた。ねえ、私とS「結婚してくれ！」…え？」  
「俺が今まで耐えたのは神様がいたからだ。最初は分からなかつ

た。でも、おまんこちゃんランドで神様と最初に出会った時、あれが初めての初恋だつた。道であつた時だつてそう。ふつうは世界を破壊したんだ。少しぐらい人類として怒るべきだつた。でも俺はどうでもよかつた。ただしやべれることがうれしくて、楽しかつた。もうSEXじや我慢ならない。俺と、俺と結婚してください。」

自分でも強引だとは思つてゐる。でも神様から告白されたくはなかつた。これもちつぽけな自分の意思なのだろうか。そして、もうSEXじや満足できない。大それたことだが神様が欲しくなつてしまつたのだ。

肝心の神様は口を呆けてしばしフリーズしてゐた。

その姿も本当にかわいく思いながらも自分も緊張してゐた。

振られたらどうしようかと重すぎと言われ拒否されたらどうしようと。

心臓が早く動きすぎて溶けてしまいそうだ。

神様は呆けていた状態から復帰し口を数回開け、言葉を吟味しているのであうか口をもごもごさせ振り向いた。その顔には涙が流れていった。

「うれしい。」

：神かよ。いや、神か。

神様つてこんなにかわいくていいのかよ。

「君に告白して三度目になるのかな。こういうの日本では三度目の正直つていうんだよね。」

そう彼女は冗談っぽくお茶目に言つた。

：日本は君が壊したんだけどなど突っ込みたい。

「私からも、結婚してください。  
好きです。」

その後の顛末は語らなくてもいいだろう。

二人がどんな運命をたどるかは分からぬ。

ただ、凡夫な言葉で表すならば「ハッピーエンド」という言葉が似合うのかもしれない。